

祇園祭が遂げたごみ減量～広がるリユース食器～

(一社) 祇園祭ごみゼロ大作戦 理事長 おおた こうへい
NPO法人 地域環境デザイン研究所 ecotone 代表理事 太田 航平

京都の夏を彩る祇園祭。祇園祭は八坂神社の祭礼で、大阪の天神祭・東京の神田祭とともに、日本三大祭の一つにあげられており、およそ1,100年と歴史の長いこと、またその豪華さ、祭事が1か月にわたる大規模なものであることで広く知られています。祭のハイライトは7月17日（前祭）と24日（後祭）に行われる33基の山鉾巡行です。この山鉾巡行前夜となる前3日間を宵山行事といい、なかでも15日（宵宵山）と16日（宵山）のまちなかは歩行者天国となると同時に、ずらっと600を超える屋台や私有地での仮設店舗が立ち並び、国内外から毎年約60万人の人出で賑わいます。

しかし、来場者数に比例して課題となるのが廃棄物です。足の踏み場に困る程の散乱ごみや、鉾や山と同じくらい高く積み重ねられるごみ袋は、長い間“宵山の当たり前の風景”となっていました（写真1）。大学から京都に来た私はこの宵山を楽し



写真1 ごみの山

みに遊びに出かけた際、「どうしてこういう状態になってしまうんだろう？」と課題の大きさに圧倒された記憶が今でも蘇ります。

2001年、「NPO地域環境デザイン研究所 ecotone」を立ち上げたのは大学3回生の時。大量生産・大量消費・大量廃棄の経済システムをシフトさせる仕組みづくりを市民の立場から行う必要性を強く感じ、中でもリデュース/リユースの2Rに特化した仕組みづくりから活動をスタートしました。祇園祭の廃棄物をなんとかしたい！という思いを元に、お祭りやイベントごみの組成調査を繰り返し、その容積の6～7割を占める使い捨て容器を取り除くことが出来ないか？との考えから、繰り返し何度も使用出来る食器を「リユース食器」と名づけ、その循環システムをさまざまな社会実験を繰り返し開発しました。また誰にでもわかりやすい「リユースマーク」を通した啓発（写真2）や、資源の分別とリユース食器の返却をセットにしたステーションの設置などを計画的に展開することで、お祭りやイベントでの「捨てる」から「分ける」「返却する」という行為のデザインが可能であるという実績を積み重ねました。

この活動の中では京都市との協働も多数行い、京都市主催イベントは早くから率先してリユース食器の導入を実施しています。その取り組みを市内でのお祭りやイベント主催者にも広げるために、京都市は「京都市エコイベント実施要綱」



写真2 リユースマークの入った提灯



写真3 夜店の販売



写真4 活躍するボランティア

を策定し、リユース食器の導入経費の助成等を行うに至っています。

これらの丹念な実績や市民の認知を背景に、市民/事業者/行政のパートナーシップのもと実行委員会（現在は一般社団法人）を立ち上げ、念願かなって2014年祇園祭（前祭）の宵山にリユース食器を導入する「祇園祭ごみゼロ大作戦」が実現しました。具体的には、露店商の協力のもと、食品の一部（たこ焼きや焼きそば、お好み焼きなど）にこれまでに例のない規模である約21万食分のリユース食器を導入いただいています（写真3）。また、当日ボランティアスタッフとして募集し全国から集まったのべ2,200名の方々とともに、計画的に配置した50か所にエコステーションの設置を通して来場者への資源の分別呼びかけなどを展開しています（写真4）。この取り組みを通してこれまで宵山期間に排出されていた約60tonの燃やすごみを初年度は34tonにまで減量させることが出来ました。その後、本年度まで4回実施し、さまざまな要因から毎年減量というわけではありませんが、リユース食器導入前の祇園祭と比べた場合、ごみの大幅な減量に成功し、これまで課題となっていた散乱ごみの解決にも至っています。当日のごみの組成を調査したところ、

全体の廃棄物のうち、露店商由来のごみは約4割に留まっています。残り約6割はコンビニエンスストアやファストフード、来場者の持ち込みなどが占めていることを多くのみなさんは知りません。祇園祭ごみゼロ大作戦は協賛や寄付、京都市からの補助金など約1,600万円を集め実施していますが、本来このごみに関連する諸費用は誰が負担すべきものでしょうか。ボランティアスタッフの主体的な活動がなくともごみのない持続可能な祭を築くための仕組みづくりが次の私たちの課題です。

祇園祭ごみゼロ大作戦のボランティアスタッフには、全国の自治体職員のみなさんや市民グループが参加し、ここでの経験を持ち帰り活かしていただいています。2017年には大阪の天神祭でも「天神祭ごみゼロ大作戦」がスタートしました。日本三大祭のうち2つの祭が本気でごみに向き合い多くのステークホルダーを巻き込みながらその解決に向けて取り組みを進めています。

機会があれば、ボランティアへの参加、また見物客としてリユース食器の利用やごみの分別に協力いただければと思います。みなさんが関わるお祭りやイベントでもぜひご参考いただき、ともに非日常から日常での取り組みに拡げて行きましょう！